



2.3-1 上部構造の耐震性能残存率  $R$  による判定（層崩壊形）

- ① 判定対象とする階と方向 \_\_\_\_階 方向：短辺方向 長辺方向  
 ② ゾーニングの要否：不要（建築物全体で判定する）  
必要（ゾーニングした区画を平面図などで明示し、区画ごとに判定する）  
 ③ 構造部材の損傷度調査結果 ※（ ）内にそれぞれの柱本数や壁枚数を記入し合計を計算する。  
 「両側柱付き壁」は、1 スパン分を1枚と数える。  
 表中の係数はせん断壁の  $\eta$  による。曲げ壁の場合は係数を修正すること。  
 内蔵鉄骨形式に応じた表を使用すること。

【非充腹形】

	柱		梁支配型柱		壁			
	せん断	曲げ	せん断	曲げ	柱なし	片側柱付き	両側柱付き	
総部材数	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	= ( )
調査部材数	( ) <sup>①</sup>	( ) <sup>②</sup>	( ) <sup>③</sup>	( ) <sup>④</sup>	( ) <sup>⑤</sup>	( ) <sup>⑥</sup>	( ) <sup>⑦</sup>	= ( )
	①×1.2 + ②×1.2 + ③×1.2 + ④×1.2 + ⑤×1 + ⑥×2 + ⑦×6 = ( )							= $A_{org}$
損傷度 0	( ) ×1.2	( ) ×1.2	( ) ×1.2	( ) ×1.2	( ) ×1	( ) ×2	( ) ×6	= ( ) = $A_0$
損傷度 I	( ) ×1.14	( ) ×1.14	( ) ×1.14	( ) ×1.14	( ) ×0.95	( ) ×1.9	( ) ×5.7	= ( ) = $A_1$
損傷度 II	( ) ×0.72	( ) ×0.9	( ) ×0.84	( ) ×0.9	( ) ×0.6	( ) ×1.2	( ) ×3.6	= ( ) = $A_2$
損傷度 III	( ) ×0.36	( ) ×0.6	( ) ×0.48	( ) ×0.6	( ) ×0.3	( ) ×0.6	( ) ×1.8	= ( ) = $A_3$
損傷度 IV	( ) ×0	( ) ×0.24	( ) ×0.12	( ) ×0.24	( ) ×0	( ) ×0	( ) ×0	= ( ) = $A_4$
損傷度 V	( ) ×0	( ) ×0	( ) ×0	( ) ×0	( ) ×0	( ) ×0	( ) ×0	= 0 = $A_5$

【充腹形】

	柱		梁支配型柱		壁			
	せん断	曲げ	せん断	曲げ	柱なし	片側柱付き	両側柱付き	
総部材数	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	= ( )
調査部材数	( ) <sup>①</sup>	( ) <sup>②</sup>	( ) <sup>③</sup>	( ) <sup>④</sup>	( ) <sup>⑤</sup>	( ) <sup>⑥</sup>	( ) <sup>⑦</sup>	= ( )
	①×1.8 + ②×1.8 + ③×1.8 + ④×1.8 + ⑤×1 + ⑥×2 + ⑦×6 = ( )							= $A_{org}$
損傷度 0	( ) ×1.8	( ) ×1.8	( ) ×1.8	( ) ×1.8	( ) ×1	( ) ×2	( ) ×6	= ( ) = $A_0$
損傷度 I	( ) ×1.71	( ) ×1.71	( ) ×1.71	( ) ×1.71	( ) ×0.95	( ) ×1.9	( ) ×5.7	= ( ) = $A_1$
損傷度 II	( ) ×1.26	( ) ×1.44	( ) ×1.35	( ) ×1.44	( ) ×0.6	( ) ×1.2	( ) ×3.6	= ( ) = $A_2$
損傷度 III	( ) ×0.72	( ) ×1.08	( ) ×0.9	( ) ×1.08	( ) ×0.3	( ) ×0.6	( ) ×1.8	= ( ) = $A_3$
損傷度 IV	( ) ×0.18	( ) ×0.54	( ) ×0.36	( ) ×0.54	( ) ×0	( ) ×0	( ) ×0	= ( ) = $A_4$
損傷度 V	( ) ×0	( ) ×0	( ) ×0	( ) ×0	( ) ×0	( ) ×0	( ) ×0	= 0 = $A_5$

$$\sum A_j = A_0 + A_1 + A_2 + A_3 + A_4 + A_5 = ( )$$

④ 耐震性能残存率  $R$   $R = \frac{\sum A_j}{A_{org}} \times 100 = \frac{( )}{( )} \times 100 = ( )$

上部構造の耐震性能残存率 $R$ による被災度区分		
<input type="checkbox"/> 無被害 ( $R=100$ )	<input type="checkbox"/> 軽微 ( $95 \leq R < 100$ )	<input type="checkbox"/> 小破 ( $80 \leq R < 95$ )
<input type="checkbox"/> 中破 ( $60 \leq R < 80$ )	<input type="checkbox"/> 大破 ( $R < 60$ )	<input type="checkbox"/> 倒壊 (崩壊・落階等によりほぼ $R \doteq 0$ とみなせる)

2.3-2 上部構造の耐震性能残存率  $R$  による判定（全体崩壊形）

- ① 判定対象とする方向：□短辺方向 □長辺方向  
 ② 構造部材の損傷度調査結果 ※（ ）内にそれぞれのヒンジ箇所数を記入し合計を計算する。  
 内蔵鉄骨形式に応じた表を使用すること。

【非充腹形】

	曲げ柱	曲げ梁	片側柱付き壁	連層耐震壁	合計	
総部材数	( ) + ( ) + ( ) + ( )	= ( )				
調査部材数	( ) <sup>①</sup> + ( ) <sup>②</sup> + ( ) <sup>③</sup> + ( ) <sup>④</sup>	= ( )				
	①×1.2 + ②×1 + ③×10 + ④×30	= ( )				= $B_{org}$
損傷度0	( )×1.2 + ( )×1 + ( )×10 + ( )×30	= ( )				= $B_0$
損傷度I	( )×1.14 + ( )×0.95 + ( )×9.5 + ( )×28.5	= ( )				= $B_1$
損傷度II	( )×0.9 + ( )×0.75 + ( )×7 + ( )×21	= ( )				= $B_2$
損傷度III	( )×0.6 + ( )×0.5 + ( )×4 + ( )×12	= ( )				= $B_3$
損傷度IV	( )×0.24 + ( )×0.2 + ( )×1 + ( )×3	= ( )				= $B_4$
損傷度V	( )×0 + ( )×0 + ( )×0 + ( )×0	= 0				= $B_5$

【充腹形】

	曲げ柱	曲げ梁	片側柱付き壁	連層耐震壁	合計	
総部材数	( ) + ( ) + ( ) + ( )	= ( )				
調査部材数	( ) <sup>①</sup> + ( ) <sup>②</sup> + ( ) <sup>③</sup> + ( ) <sup>④</sup>	= ( )				
	①×1.8 + ②×1 + ③×10 + ④×30	= ( )				= $B_{org}$
損傷度0	( )×1.8 + ( )×1 + ( )×10 + ( )×30	= ( )				= $B_0$
損傷度I	( )×1.71 + ( )×0.95 + ( )×9.5 + ( )×28.5	= ( )				= $B_1$
損傷度II	( )×1.44 + ( )×0.8 + ( )×7 + ( )×21	= ( )				= $B_2$
損傷度III	( )×1.08 + ( )×0.6 + ( )×4 + ( )×12	= ( )				= $B_3$
損傷度IV	( )×0.54 + ( )×0.3 + ( )×1 + ( )×3	= ( )				= $B_4$
損傷度V	( )×0 + ( )×0 + ( )×0 + ( )×0	= 0				= $B_5$

$$\sum B_j = B_0 + B_1 + B_2 + B_3 + B_4 + B_5 = ( )$$

③ 耐震性能残存率  $R$  
$$R = \frac{\sum B_j}{B_{org}} \times 100 = \frac{( )}{( )} \times 100 = ( )$$

上部構造の耐震性能残存率  $R$  による被災度区分

- 無被害 ( $R=100$ )      □軽微 ( $95 \leq R < 100$ )      □小破 ( $80 \leq R < 95$ )  
 □中破 ( $60 \leq R < 80$ )      □大破 ( $R < 60$ )      □倒壊 (崩壊・落階等によりほぼ  $R \approx 0$  とみなせる)

2.4 コンクリート系非構造壁の被害状況による判定

① 判定対象とする階：層崩壊（\_\_階） 全体崩壊 方向：短辺方向 長辺方向

※原則として、上部構造の判定と同じ階・方向とする

② 非構造壁の被害状況調査結果

被害レベル	非構造壁に損傷度IV以上の被害が		
	一部ある	約半数ある	ほぼ全数ある
被災度	小破	中破	大破

コンクリート系非構造壁の被害による被災度区分

無被害 小破 中破 大破  
(被害有の場合、被害状況などを記入する)

2.5 津波を受けた建築物の浸水状況による判定

① 津波による浸水状況調査結果

(全層対象の場合)

(各階対象の場合)

被害レベル	全層の1/2未満が浸水	全層の1/2以上が浸水	全層浸水
被災度	小被害	中被害	大被害

被害レベル	層の1/2未満が浸水	層の1/2以上が浸水	層の梁下端に届く浸水
被災度	小被害	中被害	大被害

津波を受けた建築物の浸水による被災度区分

無被害 小被害 中被害 大被害  
(被害有の場合、被害状況などを記入する)

3. その他の被害

付属構造物（床スラブ、ペントハウス、屋外階段、屋上煙突、渡り廊下、エキスパンションジョイントなど）の被害（被害有の場合、被害状況、危険箇所、処置の要否などを記入する）

4. 復旧の要否の判定

気象庁震度階級：6強以上 6弱 5強 5弱以下（要詳細調査）

表3 基礎構造の復旧の要否

表4 上部構造の応急復旧の要否

被災度	小破	中破	大破
5弱以下	×	×	×
5強	△	×	×
6弱	○	△	×
6強以上	○	○	△

被災度	軽微	小破	中破	大破・倒壊
震度階級	$95 \leq R < 100$	$80 \leq R < 95$	$60 \leq R < 80$	$R < 60$
5弱以下	×	×	×	×
5強	◎	△	△	△
6弱	◎	○(△)	△	△
6強以上	◎	◎(○)	○(△)	△

※( )は1971年以前の建築物の場合

・基礎構造の被災度：無被害 小破 中破 大破  
 ・基礎構造の復旧の要否：  
不要（無被害） 補修（○） 補修（詳細調査が望ましい）（△） 詳細調査（×）

・上部構造の被災度：無被害 軽微 小破 中破 大破 倒壊  
 ・上部構造の応急復旧の要否：  
不要（無被害） 軽微な補修（◎） 応急復旧（構造補修）（○）  
応急措置または応急復旧（△） 詳細調査（×） 明らかに応急復旧不可能（倒壊）

・非構造壁の被災度：無被害 小破 中破 大破

・津波による被災度：無被害 小被害 中被害 大被害

5. 被災部分のスケッチ、所見等のメモなど

A large rectangular area filled with a grid of dotted lines, intended for sketching and taking notes. The grid consists of 20 columns and 30 rows of small squares.